

“言葉”は“実体”と“漢字”と

三歳を過ぎて、新しい言葉を教える場合には、出来たら、実体に即して漢字と共に教えることが望ましいのです。“実体”と“言葉”と“漢字”と、この三者を結び付けて頭の中に記憶させることが、言葉の学習では重要なことだと考えるからです。

“言葉”が、実在を思い起こさせる“聴覚的信号”であるのに対し、“漢字”は、実在を思い起こさせる“視覚的信号”です。だから、幼児が実在に触れるごとに、実在を体験するごとに、これを“言葉”で表現して示すと同時に“漢字”でも表現して示すことが大切なのです。

視覚の方が聴覚よりも記憶保持の効果が強いばかりでなく、同時に両方の器官に記憶させた方が数倍も記憶保持の効果が強まるからです。これは、アルファベットを使っているアメリカの実験で証明していることですが、漢字の方がその効果は一層強いものがあるのです。

「学問、音楽、学校、楽器」と、漢字で表記しますと、“学問”と“学校”との関連があり、“音楽”と“楽器”と関連があることがすぐに解ります。ところが、「がくもん、おんがく、がっこう、がっき」を、ひらがなで表記します

と、“がくもん”と“おんがく”、“がっこう”と“がっき”と関連づけたいとなります。

“おんがく”は“音の学問”と誤解する人が出て来るかも知れませんが、“がっき”があるから“がっこう”と言うのかと思う子供があるかも知れません。

ともあれ、日本語は、漢字によって組み立てられ、作られた言葉が多いので、漢字と共に理解することが、正しい理解にはぜひ必要なことです。そして、視覚と聴覚との両方から言葉を理解することが、記憶を確実にすることに役立ちますので、一層、言葉を漢字と共に学習することが必要だ、ということになります。